
進んで関わろうとする児童の育成（研究主題）

— 外国語に慣れ親しませる工夫とコミュニケーション活動を大切にした授業づくりを通して —（副題）

（学校名） 宮城県登米市立佐沼小学校
（役職・職名） 校長 高橋 正則

1 主題設定の理由

(1) 今日の教育課題から

現在、国際交流が盛んに行われ、グローバル化が急速に進んでいる。未来を担う子供たちには、様々な国の人々とコミュニケーションを取るためのツールとして、英語で自分の思いや考えを表現したり相手を理解しようとしたりする力が必要となる。また、次期学習指導要領では、新たに「外国語科」が位置付けられる。こうしたことから、外国語活動の授業の在り方を工夫していく必要があると考えた。

(2) 学校教育目標の具現化から

本校では、学校教育目標『自主・信頼・健康』に満ちた豊かな人間性をもち、ともに磨き合い、『夢』に向かってたくましく生きる児童を育成する』の具現化のため、「かかわりの中でともに育つ」ことを教員間で共有し、指導に当たっている。自分の考えをもち、他者と進んでコミュニケーションを図ろうとすることは、生きる力を育み、人間として成長することへつながると考える。本研究を通して、児童のコミュニケーションへの意識を高めることは、本校の教育目標を具現化するうえで有効であると考えた。

(3) 児童の実態から

本校では、一昨年度より外国語活動の研修と授業実践に取り組んでおり、「英語を使ってみたい」「英語を使ったコミュニケーションが好き」と思う児童が増加してきている。一方で、高学年になるにつれて外国語活動の授業に対する姿勢が消極的になり、聞くことや話すことを好む児童が減少する傾向が見られることや自ら関わろうとする意識が低いことなどの課題が見られた。

学習中の話し合い活動では、自分の考えを伝えることに対する個人差が大きく、進んで話すことができる児童でも一方的に考えを伝える様子が見られるなど、相手意識をもって話すことに課題がある。また、聞くことについても、相づちやうなずきなどが少なく、相手を意識しながら聞くまでには至っていない現状がある。

以上から、外国語に慣れ親しませることとともに、コミュニケーション活動の充実を図った授業実践を通して、相手と進んで関わろうとする意識や能力を養っていく必要があると考え、本主題を設定した。

2 研究目標

互いに進んで関わろうとする児童を育成するための指導の在り方を、外国語に慣れ親しませる工夫とコミュニケーション活動の充実に関する研究を通して探っていく。

3 研究の視点

児童が外国語を用いて相手と進んで関わろうとするためには、外国語に十分に慣れ親しませることとコミュニケーションのよさや大切さを実感させることが必要であると考え、次の3つの視点を設定した。

(1) 外国語に慣れ親しませる工夫

- ① 自然に語句や表現を聞いたり、発話したりする活動の工夫
- ② 興味・関心を高める、教材・教具の活用や提示

(2) コミュニケーション活動を充実させる工夫

- ①目的、場面、状況等を明確にした活動の設定
- ②相手と関わる楽しさ、よさや大切さ等を感じさせる振り返り

(3) 外国語に慣れ親しませるための日常的な取組

- ①外国語に親しむ日（E～スDAY）の設定
- ②外国語に親しませるための校舎内の環境整備

4 研究の方法

- (1) 研究の視点に基づいた授業研究の実践と検討
- (2) 外国語に対する意識調査の実施による変容分析

5 年間指導計画、単元構成、授業構成の考え方

(1) 年間指導計画

令和2年度からの中学年外国語活動、外国語科の完全実施に向けて、低学年から英語の語句や表現に慣れ

親しませ、児童の発達段階に応じたコミュニケーション活動に取り組みしておくことが有効と考え、本校独自で年間指導計画を作成し、実践を行った。

○1・2年生…「英語活動（創意）」5時間

○3・4年生…「外国語活動」15時間

○5・6年生…「外国語活動」50時間

(2) 単元構成

本研究では、バックワードデザインで単元を構成することとした。まず、単元のゴール（単元の最後に設定するコミュニケーション活動）として、児童に相手と関わりたいという思いをもたせる活動を設定する。そこから、その活動のために必要な語句や表現は何か、それを獲得するためにどのような活動を行うかを逆行して考え、単元を構成していく。

単元のゴールは、単元の導入段階に児童に示して学習の見通しをもたせ、活動の目的や意義を意識させるようにした。

(3) 授業構成

本研究では、授業の流れの大枠を統一し、児童が見通しをもって安心して学習に取り組めるようにした。インプットからアウトプットへのつながりを大切にしたいストーリー性のある授業構成を行うとともに、相手と関わる場面を意図的に設定して、関わりの中で英語を聞いたり話したりする機会を増やすことで、相手と関わるよさを実感できるようにした。

6 研究の実際

(1) 外国語に慣れ親しませる工夫

①自然に語句や表現を聞いたり、発話したりする活動の工夫

児童が自信をもって英語を使ったコミュニケーション活動を行うためには、語句や表現に十分に慣れ親しませる必要がある。語句や表現を繰り返し機械的に練習する活動ではなく、コミュニケーションを取るためのツールとして使う活動を通して慣れ親しませることが大切だと考えた。

【相手とのやり取りを楽しむゲーム的活動】

授業の導入では、帯活動として「Small Talk」「歌・チャンツ」「ゲーム的活動」等を設定した。この「ゲーム的活動」で、相手とやり取りを楽しみながら語句や表現に慣れ親しませるようにした。

低学年や中学年で行ったフェイントリピートゲーム（図1）は、語句に慣れ親しませることをねらった活

動である。その単元で扱う語句を示し、HRTやALTが示した絵と一致しない音声をわざと発する。児童はそれに惑わされずに絵と一致する音声を発しようと、しっかり聞き取り、自然に語句に慣れ親しんでいた。



図1 フェイントリピートゲーム

高学年で行ったラッキーカードゲームは、表現に慣れ親しませることをねらった活動である。どのカードがラッキーカードになるか最後まで分からない状況の中で、グループ内でカードを交換するやり取りを繰り返す。友達との駆け引きを楽しみながら、その単元で扱う表現を繰り返し話したり聞いたりしていた。

②興味・関心を高める、教材・教具の活用や提示

児童の話したい、聞きたいという思いを高めるためには、自分の本当の思いを話せるように、取り上げる語句や表現、活動内容を児童の実態に応じて精選する必要がある。また、慣れ親しんだ語句や表現が実際にどのような場面で使えるのか、HRTやALTがモデルを示して具体的なイメージをもたせる必要があると考えた。

【ICTを活用したデモンストレーションの提示】



図2 HRTとALTの「Small Talk」の映像

中学年や高学年では時数が増え、HRTが一人で授業を行う機会が多くなる。そのため、HRTとALTの「Small Talk」をあらかじめ撮影しておき、その映像を授業の導入段階やデモンストレーションの提示の際に活用するようにした（図2）。HRTやALTといった身近な人が、自然な会話の中からその単元や

時間に扱う表現のやり取りを行うようにしたので、児童は会話の内容に興味をもって聞いている様子が見られた。

(2) コミュニケーション活動を充実させる工夫

①目的、場面、状況等を明確にした活動の設定

コミュニケーション活動への意欲を高めるためには、その活動を行う目的や場面、状況等を明確に示し、児童が自分の思いを伝えたい、相手の思いを知りたいと思う活動を設定することが重要であると考えた。

【目的を明確にしたコミュニケーション活動】

3年生の「What's this?」の単元では、「ALTとスリーヒントクイズ大会をしよう」という単元のゴールを設定した。慣れ親しんだ語句や表現を使って、相手の反応を見ながらヒントの出し方を工夫してクイズを出し合う姿が見られた(図3)。



図3 目的が明確なコミュニケーション活動

【相手を意識したコミュニケーション活動】

5年生の「Hello, everyone.」の単元では、「これまでの学習を生かして自己紹介スピーチをする」という単元のゴールに向けて、書くことを取り入れた学習を行った。これまでの学習を振り返りながら少しずつ自己紹介スピーチを組み立てていき、相手に伝わるように話すことや相づちを打ちながら聞くことを意識させた。その際に、これまで慣れ親しんできた相づちの言葉を集めた「コミュニケーションワードリスト」(図4)を作成したことで、進んで相づちを打つ姿が見られた。

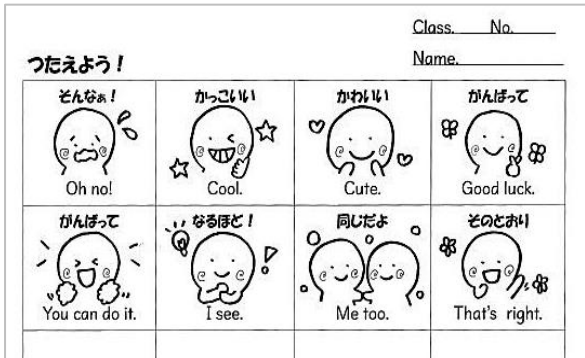


図4 コミュニケーションワードリスト

②相手と関わる楽しさ、よさや大切さ等を感じさせる振り返り

コミュニケーションを取ることのよさを実感させ、次のコミュニケーション活動への意欲につなげるためには、コミュニケーションに対する気付きを共有し、それを価値付けることが大切であると考えた。

【児童の実態に応じた振り返り】

授業の終末段階で、本時のねらいに即して観点ごとに学習を振り返る場面を設定した。振り返りの方法は、児童の発達段階に応じて変えるようにした。低学年では、HRTの発問にフェイスマークを見て挙手で応じるようにし、短時間で行うことや感想を交流させることを重視した。中学年や高学年では、自己評価や感想を記述する「ふり返りカード」(図5)を用いて、振り返りを行った。自分ができるようになったことや友達とのやり取りについて記述することで、達成感を味わっている様子が見られた。

5年 UNIT 1 振り返りカード						
		Name () No.()				
自己紹介スピーチをしよう	1	2	3	4	5	
目次	/ ()	/ ()	/ ()	/ ()	/ ()	
めあて						
学習に進んで取り組んだか	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	
進んで英語を話そうとしたか	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	
英語を聞き取ることで良かったか	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	
たずねられたことに英語で答えることができたか	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	
今日のめあてを達成できたか	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	
<感想1> 気付いたこと 頑張ったこと						
<感想2> コミュニケーション について ・相手を意識して話せたかな? ・相手の言葉が聞き取れたかな?						

図5 学習を自己評価する「ふり返りカード」

(3) 外国語に慣れ親しませるための日常的な取組

①外国語に親しむ日(E~sDAY)の設定

日常生活の中で外国語に触れていると意識する機会は多くない。外国語に慣れ親しませるためには、意識して外国語に親しむ日を設定する必要があると考えた。

【外国語に親しむ日(E~sDAY)】

毎週火曜日を、外国語に親しむ日(E~sDAY)とした。朝の会の挨拶や健康観察、日付や曜日、天気の確認を英語で行い、その後は外国語活動の帯活動と関連付けて「歌・チャンツ」や「ゲーム的活動」を行う時間も設定した。また、ALTが朝や昼、帰りの放送を英語で行い、給食の時間にはTV放送で英語の本

の読み聞かせを行った(図6)。読み聞かせの導入では、HRTとALTの「Small Talk」を取り入れ、児童の興味・関心を高めるようにした。



図6 ALTによる絵本の読み聞かせの導入(TV放送)

②外国語に親しませるための校舎内の環境整備

次期学習指導要領では、外国語科で読むことや書くことも扱うことになる。耳からだけではなく、目からも外国語の語句や表現に慣れ親しませる必要があると考えた。

【外国語に関する掲示物の充実】

全校児童が目にする場所に季節や行事に合わせた外国語の掲示を行った。各学年の教室前の掲示板は「外国語コーナー」とし、単元の学習内容に合わせた掲示を行った(図7)。ALTコーナーでは、外国の文化や行事について紹介し、国際理解にもつなげることを意識した。3か所ある階段には、それぞれの場所ごとにテーマを決めて1段ずつ絵と文字が書かれたカードを掲示した(図8)。英語で数を数えながら階段を上るなど、日常生活の中で外国語に慣れ親しむ姿が見られた。



図7 外国語コーナー



図8 階段の掲示

7 研究のまとめ

(1) 研究の成果

①外国語に慣れ親しませる工夫

表1 意識調査結果の変容(外国語への慣れ親しみ)

質問項目	6月	12月
英語や外国の文化について知ることは好きですか。	78%	81%
学習した英語を使ってみたいと思いますか。	83%	84%

表1の通り、「外国について知ることが好き」「学習した英語を使ってみたい」と回答する児童の割合が増加した。コミュニケーションツールとして楽しみながら語句や表現に慣れ親しませることが有効だったと考えられる。

②コミュニケーション活動を充実させる工夫

表2 意識調査結果の変容(コミュニケーション)

質問項目	6月	12月
英語を使って伝えることは好きですか。	74%	79%
相手と進んで関わろうとしていますか。	73%	80%

表2の通り、「英語を使って伝えることが好き」「相手と進んで関わろうとしている」と回答する児童の割合が増加した。単元のゴールを明確にして授業づくりを行ったことで、目的と相手を意識したコミュニケーション活動を行うことができ、児童の達成感につながったと考えられる。

③外国語に慣れ親しませるための日常的な取組

表3 意識調査結果の変容(日常的な取組)

質問項目	6月	12月
日常生活で英語を使うことは好きですか。	84%	86%

表3の通り、「日常生活で英語を使うことが好き」と回答する児童の割合が増加した。「E～SDAY」で繰り返し外国語に触れたこと、環境整備に努め、外国語の語句や表現、文化を身近に感じられるようにしたことは、児童が自然に外国語に対する親しみを感じることに効果があったと考えられる。

(2) 今後の課題

①語句や表現に慣れ親しむ機会の十分な確保

低学年や中学年では、時数が少なく、授業の間隔が開いてしまうため、語句や表現に慣れ親しむのに時間が掛かってしまった。また、高学年では、次々と新しい語句や表現が出てくるので、戸惑う児童が見られた。繰り返し定期的に英語に触れたり、授業だけでは足りないインプットを補ったり時間が必要である。「E～SDAY」の活動を広げ、授業との接続をより明確にしていきたい。

②より良い関わりに向けた振り返りの在り方

より相手を意識したコミュニケーション活動にしていくなために、活動の間でも振り返りを行い、より良い関わり方を意識させるようにしたい。